

# 被災地域における生活文化 保存活動の意義とその展望

宮城県気仙沼市の尾形家住宅を事例に

Significance and Future Prospects of Activities to Preserve Lifestyle  
and Culture in Disaster-hit Areas : A Case Study of the Ogata Residence  
in Kesenuma City, Miyagi Prefecture

葉山 茂

HAYAMA Shigeru

はじめに

- ①文化財レスキュー活動と地域開発
- ②地域社会をいかに描くか
- ③地域の中心的存在としての小々汐・尾形家
- ④物質・場所が身体を通して喚起する記憶
- ⑤考察
- ⑥おわりに

## 【論文要旨】

本稿は被災地でおこなわれる文化財レスキュー活動を地域開発の視点からとらえ、課題を検討することを目的とする。事例として国立歴史民俗博物館が携わった宮城県気仙沼市小々汐の個人住宅、尾形家住宅における生活用具・民具・文書・建材の救援活動を取り上げた。

課題の検討にあたり、建物や生活の痕跡が失われた被災地で現在、地域を見つめる地域開発の視点が必要であることを論じた。そして民俗学における地域開発の問題を整理し、地域開発の議論が観光に偏重している現状と、民俗学における地域開発の視点を遡ると、宮本常一の「郷土教育」に至ることを論じた。また宮本常一の「郷土教育」が人びとの論理を起点に検討されていたことを論じ、被災地でも地域開発の文脈で人びとがいかに生きてきたのか、そして現在ある問題をどう解決するのかという視点で文化財レスキューの結果を活かす必要性があることを論じた。

以上の点を踏まえ、地域社会の人びとの生き方を検討するとき、人びとが自然や他者との間で築く関係性に注目し、その関係性の具体的な中身を検討する必要性を論じた。その上で尾形家の歴史を概観し、尾形家から救ったものからみえる社会関係を御札、オンラサマ、葉箱などの事例から紹介した。

また物質の背景にある人びとの記憶が生起する過程を、尾形家のワラ打ち石搜索過程を例に論じた。そして物質を前にして語られる物語が、単なる個人の内部的な記憶ではなく、物質や場所と密接に結びついており、条件が揃ったときに生起してくることをギブソンのアフォーダンスの議論を援用して論じた。

以上のことから、記憶は状況依存的に生じることと、その状況を生み出すツールとして文化財レスキューで救われた物質が機能する可能性を論じ、インフラストラクチャーが整備されたあとのそれらの運用という地域開発の課題に対して、物質の背景にある生活や文化を救う試みが役立つ可能性があることを論じた。

【キーワード】文化財レスキュー、地域開発、物質文化、経験、記憶

## はじめに

本稿の目的は被災地でおこなわれる被災した文化財を救い保全する活動、すなわち文化財レスキュー活動を地域開発のなかに位置付け、被災地の生活文化の復旧における意義と展望を検討することである。事例として国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が携わった宮城県気仙沼市小々汐<sup>ここしお</sup>の個人住宅、尾形家住宅における生活用具・民具・文書・建材の救援活動を取り上げる。

筆者は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による津波で流され倒壊した尾形家住宅で、歴博メンバーの一人として、流された生活用具・民具・文書・住宅の建材などを救う活動に携わってきた。このような被災地で地域の文化財を救い出す活動は、被災文化財等救援活動、または文化財レスキュー活動とよばれる。この活動は、文書や民具、美術品などの物質文化、動産文化財を救うことを目的としている。

2011年3月には、東北地方太平洋沖地震と長野県北部地震という2つの大きな地震が起きた。これらの地震のあと、地元の博物館や資料館、教育委員会をはじめとして、全国の博物館や大学などの研究者、スタッフ、ボランティアなどが、「被災地の文化を救え」、「被災地の歴史を救え」<sup>(1)</sup>を合い言葉に、被災地域の文化を後世に残すことを目的として、被災地の広い範囲で活動した。その結果、多くの被災資料・文化財が被災現場から救い出され、保全された。

さらに東北地方太平洋沖地震や長野県北部地震をきっかけに、文化財レスキュー活動を効率的に進める観点から、地域の生活文化や自然などの資料やデータを集積する博物館のネットワークが重視されるようになった。そして歴史や民俗を標榜する博物館・資料館などで、災害時に助け合うための文化財レスキューネットワークを構築する試みが進んでいる<sup>(2)</sup>。

以上のように、文化財レスキュー活動は災害が発生した直後からの取り組みによって大きな成果を上げた。一方で、活動の成果を被災した地域の人びとに還すことが現在の課題となっている<sup>(3)</sup>。地域への還元の方法として、成果の公開がある。しかし博物館や資料館から救ったものと個人住宅から救ったものでは、おなじ被災文化財でありながら、その性格は異なる。

被災した博物館や資料館の資料は公的な性格をもったものであり、所有者も公的機関、またはそれに準じる場合が多い。したがって公的な性格の強い資料については、博物館や資料館が施設を再建して公開すれば、地域貢献と成果の公開をすることができる。

一方、本稿が扱うような個人住宅における文化財レスキュー活動では、個人住宅にあるものは私的な所有物であり、博物館や資料館の場合と同じような成果の公開はしづらい場合も多い。その結果、救ったものを活用する方途が決まらず、保管されたままになることも多い。

個人住宅から救ったものは、現状では公的機関が管理していても個人の所有物であり、一時的な保管状態に過ぎないのである<sup>(4)</sup>。そこには個人情報保護という課題がある。たとえば現在生活している人びとが隠しておきたい情報などもある。また一見、役目を終えたように見える古文書も、地域で解決すべき課題が生じたとき、その古文書が証拠としての価値をもつこともある。被災地で救ったものを手放しに歴史時代の遺物とみなせるわけではないのである。

一方で、文化財レスキュー活動で個人住宅から救われるものは、研究者が学術的な見地から重要

とみなしたものが多い。ところがそうやって残ったものには、前述の個人情報の保護という課題とは矛盾するようではあるが、所有者や地域の人びとが今後の生活にとっては不必要とみなすものも多く含まれている。

すると外部からやってきた人びとがどれほど保全に労力をかけても、結局は救う側と所有者との意識の差が原因となって、所有者は救ったものが手元に戻った直後から保管方法に困ることもありうる。また、仮にそれらが自治体や博物館などに寄贈されても、活用のしようがない状況が生まれかねない。それは将来的には救ったものの廃棄を意味する。もちろん文化財レスキュー活動を廃棄に至るモラトリアムのプロセスととらえることもできる。しかし救ったままにして放置してしまえば、結局のところ、被災地における学問のエゴとしか理解されないことになってしまう。

つまり文化財レスキュー活動の目的は、被災した文化財を被災現場から救って安定的に保管できる状況にすることに設定するだけでは不十分だと言える。救いたい、残したいと考える側が何らかの見通しを示し、それらが地域の人びとに受け入れられるプロセスが必要だろう。

その傾向は自治体や博物館などのフォーマルなセクタを対象とする場合よりも、一軒の住宅や一地域のようなインフォーマルなセクタを対象とする場合に、より鮮明になる。個人や地域を対象とした活動は、研究者と所有者の間の「助けてあげる」—「助けてもらう」という一方向の活動にはなりにくい。個人所有者のプライベートな空間に関わっていく活動では、多くのフィールドワークの方法論についての研究が述べてきたように、ラポールの構築が欠かせない[たとえば松田1991]。個人住宅や特定の地域を対象とした被災生活用具・民具・文書などを救う活動は、民俗学や人類学などの学問領域が得意とするフィールドワークとしての要素をもち合わせているのである<sup>(6)</sup>。

すると個人住宅を対象とした文化財レスキュー活動では、物質文化を救おうとする側が、結果としてどのような見通しが立てられるのか、またどう地域に貢献できるのかを明示していく双方向性の取り組みが必須になる。学術の側の都合で残したものに対して、学術的な意味付け・意義付けをしていかなければ、それらのものは文字通り「無用の長物」と化してしまい、かえって所有者や地域などに迷惑をかけることにもなる。

上記の課題に答えようとするとき、人びとの生き方に注目しながら、物質文化の背景にある自然との関わり方、社会関係の作り方、生活習慣などを記述することは一つの解決手段となる。被災現場から救った物質文化をもとに人びとの営みを記録として復元していく作業は、第三者的な視点からではあるが、地域がどのようにして維持されてきたのか、地域の人びとがどのように地域を運営してきたのかをみる機会を与えることにもなる。同時にその取り組みは、被災地域における生活文化の復旧という、災害後の地域開発の方向性を検討するときの材料の1つになるだろう。

以上の問題意識にもとづいて、以下では、地域開発という文脈のなかで個人住宅を対象とする文化財レスキュー活動が、被災後の生活文化の復旧のなかで果す意義と展望を検討しよう。

## ①……………文化財レスキュー活動と地域開発

### (1) 文化財レスキュー活動の展開

文化財レスキュー活動は1995年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）をきっかけに注目されるようになった活動である〔奥村2012 p.79〕。兵庫県南部地震で被災した地域の多くで、文化財や文書など地域の歴史を伝えるものが廃棄されたり、散逸したりする事態が生じた。

歴史資料の保存について、奥村弘は兵庫県南部地震のあとの経験を振り返って「地域の風景が失われても、それを次の世代に引き継ぐために、被災した歴史資料の保全を図ることが保全活動の目的であることが、活動の中で明確になっていった」〔奥村2012 p.7〕とし、文化財レスキュー活動を「1. 被災地の歴史関係者の生存を確保し、未来に歴史をつないでいくための活動 2. 大震災の現在の記憶を未来につなぐ地域歴史遺産を保全していく活動」〔奥山2012 p.7〕と定義した。

被災した文化財を救う活動は兵庫県南部地震のあとも、災害が起きる度に続いてきた。たとえば2004年の新潟県中越地震や2007年の新潟県中越沖地震・能登半島沖地震、2010年の兵庫県佐用町の台風にもなう水害などである。

2011年3月の災害のあと、文化庁のよびかけに対して兵庫県南部地震の際の文化財救援活動を組織化した実績のあった東京文化財研究所が中心となって、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会を立ち上げた。この組織が統括的な役割を担うなかで、被災地の博物館や資料館、そして個人の住宅や蔵を対象とした文化財を救う活動が進んだ。

とくに個人の住宅や蔵を対象に文化財レスキュー活動に携わったのは、各地の文書資料ネットワークをはじめとするボランティア団体である。個人住宅を対象にした歴博の活動も、文書資料ネットワークと同様のスタンスの活動として位置づけられる。

ところで文化財レスキュー活動の目的は、冒頭で述べたように、一義的には地域の生活や文化を知る手がかりとなる有形（動産）文化財を救うことである。したがって文化財レスキューは物質文化の痕跡としての民具や文書、そして美術品などを救援の対象とする。しかし大量に救ったあと、これらをどう活用していくのかは現在も、文化財レスキュー活動にかかわってきた者に突きつけられたままの課題である。

文書資料ネットワークは、地域歴史文化の保全と教育普及の事業を自治体と共同し継続的に進めることでこの問題を解決しようとしている。たとえば被災地を対象とした歴史研究の成果を公開したり、被災した歴史資料をつかった講演、古文書教室を開いたりする活動を続けることによって、地域歴史文化に対する人びとの理解を深めている。また活動を継続することで、新たな災害への継続的な支援や来たる災害に向けた地域歴史資料を守る現地の保全組織の立ち上げの支援などを続けている〔奥村2012 pp.156-178〕。

文書資料ネットワークの取り組みは、住民が地域の歴史に対する理解を深め、将来に起こる災害のときに文化財レスキュー活動を円滑に進めるための基盤づくりとしての活動とみることができるといえる。こうした取り組みと同時に、文化財レスキュー活動は地域開発の文脈にも位置づけることがで

きる。

被災地では現在、復旧や復興に向けた動きが活発である。復旧や復興に向けた活動に取り組むことは、地域をいかにデザインし、再構成していくかという課題に取り組むことと同義である。災害で生活を形づくってきた物質文化の多くが無くなり、建物や道路などのインフラストラクチャーが災害によって破壊され撤去されるなかで、どのように地域をつくり直していくかは目下解決すべき課題である。

その試みはそれまでの地域の特徴や魅力、営みの有り様を自覚的に理解し、それを生活や経済活動にいかにつなげていくかということである。つまり個人や地域が自己像をどのように組み立てるかということでもある。この試みは地域開発の議論が論じてきた視点と重なる。つまり地域開発の議論は人びとが地域の文化遺産をいかに発見し、それらを商品化の文脈のなかにいかに位置づけて活用しているのかを検討するものであった。

被災からの復旧や復興は、観光という側面からみると地域開発と接合しない課題であるようにみえる。しかし人びとが災害に対してどう対処をし、どう新たな生活をつくり上げていくかは、地域開発の問題そのものなのである。つまり被災地での生活の復旧や復興に直接的で即効性をもった視点として役立つかどうかは別としても、地域開発の文脈のなかで文化財レスキュー活動の成果をいかに活用するかは検討できる問題であろう。以下では、民俗学における地域開発の研究について触れて、文化財レスキュー活動が地域で果たす役割を検討しよう。

## (2) 民俗学における地域開発の議論と文化財レスキュー活動

民俗学では近年、地域開発の議論がさかんである。フォークロリズムの議論は、地域開発の議論を深める視点として、民俗学のなかで広く論じられている。フォークロリズムの議論では、地域の生活に根ざして生まれた生活文化や民俗事象が観光のなかに取り込まれ、意味が変質しながら現在に生き続けている様とその意義が活発に論じられてきた。

2003年に発行された日本民俗学会のフォークロリズム特集号には、観光を題材とした論考が3編収められている。たとえば森田真也は、フォークロリズムというツールを用いることで、ダイナミックに変容する現代社会のなかで、地域の人びとが実践し思考してきた活動の過程を汲み取ることができるとした〔森田2003〕。森田は、従来の民俗学が本質主義的な民俗や変わらない伝統に固執してきたとする。しかし観光開発が活用しようとする「民俗」や「伝統」は、地域の人びとが現代社会における政治や経済、メディアなどと深くかかわりながら創造され、混成され、再生され、破壊される経験のなかでつくられてきたのだという。すると民俗学がア priori に設定してきた本質的な「民俗」や「伝統」は対象化される必要があり、その対象化の先に人びとの具体的な実践や思考の有り様を記述できる可能性が広がるという。

森田の議論のように、観光化自体が過疎化や高齢化を経験する現代の地域社会における人びとの実践や思考の過程として描かれるようになっていく。『歴博フォーラム 民俗展示の新構築 地域開発と文化資源』〔国立歴史民俗博物館、青木2013〕は文化資源の活用例としての観光化を扱い、地域社会の人びとの営みとそこに起こる問題を検討している。

地域開発と文化資源を扱ったこの書籍に納められた6編の議論は、すべて観光化を対象としてい

る。文化資源という言葉自体が観光という言葉と結びつきやすい。かつて地域で営まれてきた生活の有り様やその痕跡としての文化遺産は、現代的な地域の課題のなかで、いかに地域の発展のために活用していくかという視点で見られる。そして文化遺産の活用は、直接的には観光に結びつく。実際、過疎化や高齢化などを抱える地域が現状を打開する手段として観光に力を入れることは多く、地域の生活文化や人びとの営みのなかで作られてきた景観、自然景観、かつての生活や産業、事件、出来事の痕跡など、ありとあらゆるものが観光と結びつく。

ところで地域の生活文化に注目し、それらを新たな生活や生業に生かそうとする議論には、地域開発のほか、観光開発や地域おこし、まちおこし、地域振興、内的発展論などがある。いずれの言葉も過疎化や高齢化、若年層の都市への流出など地域の抱える課題を解決する視点として現れてきた議論である。

これらの議論をさかのぼると、郷土教育という言葉を見出すことができる。1930年代、郷土教育は学校教育のなかに取り入れられ、実践されていた。ただし郷土教育は方法として確立していたわけではなく、実際には方言矯正などの地域差を是正するための場としてとらえられることが多かった〔山田2000〕。

この時代に民俗学で郷土教育に強い関心を示したのは宮本常一である。宮本は青年期に大阪で教員生活を送るなかで、教育の効果が十分にあらぬ原因を探った。そして、その答えが学校の求める教育と家庭や地域が求める教育のずれにあると考えた。宮本は教育側の課題を「一半はその村における生活慣習や家庭の事情に暗いことにある」〔宮本1967 p.9〕と考え、家庭や地域の状況に注目するようになっていった。宮本にとって「民俗学という学問を、趣味としてではなく痛切な必要感から学びはじめた動機はこの苦悩の解決にあった」〔宮本1967 p.9-p.10〕のである。

宮本の郷土教育を検討した小国喜弘は、宮本が構想した郷土教育の目的を「村人にとっての幸福や判断の自立的な基準としての「感情的紐帯」を、時代に即したものとして再生すること」〔小国1995 p.266〕にあったと論じている。また同様に宮本の郷土教育論が構築されていく過程を検討した山田恵吾は、宮本の郷土教育論の特色を「村落生活の安定を眼目とし、村落生活者自身が日常生活に存する身近な民俗事象を文字化することによって、無自覚のまま失われつつある伝統的な知識、規範、技術への自覚的態度を促すという、生活者としての主体形成を図るもの」〔山田2000 p.13〕であったと述べている。いわば宮本が構想した郷土教育の主眼は、自覚しないことによって見過がれていた自らの生活の有り様を意識化して、主体的な関わりにおいていかに自己像や地域像を描きだすかという点にあったと言えるだろう。

民俗学においては柳田國男が「郷土生活の研究法」〔柳田1990〕という視点を打ち出しており、一見、両者は似ている。しかし小国によれば、柳田の郷土研究の目的は「柳田の眼差しは、地方差のある多様な民俗をいかに統合するかに常に向けられていたのであり、それは、彼の民俗学研究の実際が、民俗採集に出かけるというよりは、むしろ全国の民俗収集家に発した質問状への回答を整理収集することであった点とも、密接に関わっている」〔小国1995 p.273〕と述べている。つまり柳田は郷土重出立証法や方言圏論にみられるように、比較によって日本文化の共通要素や原型を探ろうとしたのであり〔山田2000 p.12〕、国民国家における共通の認識づくりのための郷土研究であったといえるだろう。

それに対して宮本の郷土教育の視点は、歩くことを旅の手段として「旅先で出会う人々の多様な営みを「実感」という身体的な感覚に根ざして理解すること」[小国1995 p.273]だった。言い換えれば、個別の経験、個人の経験を起点として地域をみる試みであったということができよう。

ところで宮本は、民俗学的な視点から観光による地域振興に注目した人物である。宮本の議論は生活や生業活動のなかで培った知識や技能などを地域で生きるためにいかに活用していくのかという点にあった[宮本1975]。したがって地域の人びとがいかに生活を充足させていくかが宮本の考える課題であり、その充足のさせ方は観光に限らず、漁業や農業のようないわゆる生業活動であってもよかった。

つまり現在の地域開発のように観光に主眼を置いた視点というよりは、方法にこだわらず地域をいかにして発展させていくか、そしてそのなかで人びとがいかにして充足するかという内発的な視点をもっており、そのなかの一つとして観光も位置づけられていたのである。もう少し言えば、記述することによって自己像の再発見と再構築をめざした宮本の民俗学では、観光を視野に入れた地域振興に注目することは、観光という手段をつかうことによって自己や自己が所属する地域社会を外部の視点からみつめ、個人や個人が所属する地域の自己像の再発見と再構築にもとづいて新たな生き方を模索していく営みとして位置づけられていたのである。

こうしてみると、地域開発の課題は観光化によってどう地域社会が変化するのかという、現在進行形でさかんに論じられている課題と同時に、地域の語り方、個人や地域の自己像を人びとがいかに描いてきて、今後それをどう描き得るのかという、個人や地域をめぐる自己像の再発見・再構築の問題としてもとらえることができる。

このように地域開発の課題をとらえるとき、観光からは遠く離れてみえる被災地域の復旧という課題のなかでも、地域開発の視点が重要な意味をもつようになる。被災地域ではインフラストラクチャーの復旧が急がれる。そして多くの場合、インフラストラクチャーの復旧、住居の回復をもって「復興した」と宣言される。ところが当座の課題が解決しても、回復した空間・場所でいかに生きるのか、地域をどう運営するのが課題として残る。この課題を考えると、被災した地域で暮してきた個人、そしてその個人が所属する地域コミュニティの自己像を改めて問い直すことが必要となる。結局、未来は過去と無関係に構想できないのであって、過去を振り返り、現状をみつめることによって方向性を見出すことになる。そのとき、自己像の再発見・再構築のプロセスのなかに、具体性を与えるものとして文化財レスキュー活動の成果を位置付けることができる。

たとえば東北地方太平洋沖地震の被災地では、宮城県を中心に防潮堤をつくることをめぐって議論が活発になっている。また同じ宮城県では津波被害のあと、漁業を復旧する方法として漁業特区を設けて民間資本を導入しやすくすることで雇用拡大につなげようとする政策についての議論も続いている。これらのクリティカルな問題に対して、文化財レスキュー活動は直接的な成果としての解決方法を示すことはない。しかし文化財レスキュー活動の成果は、目下の政策課題や地域の決定に対して賛否を表明することではなく、地域に生きることの過去、現在、未来をより精緻に見通すための材料を提供するという点で地域に貢献できる可能性をもつ。

そのとき文化財レスキュー活動に携わる者が提供できる検討の材料は、地域社会で生きてきた人びとの生き方であり、またその変容である。つまり人びとが新しいことや未知の出来事にどうアプ

ローチし、どう切り抜けてきたのかという生き方のプロセスを示すことは、一つの成果の公開の仕方である。また活動で得た生活用具や民具、文書、建材などを生かす方法の一つになる。以上の観点に立って、以下では人びとの生き方、営みを描く視点を整理しよう。

## ②……………地域社会をいかに描くか—多様に結ばれる地域

### (1) 地域コミュニティは一枚岩か

民俗学や人類学は、数多くの地域社会を対象とした調査をしてきた。任意に地域社会の範囲を限定した調査は、地域社会のあり方をより詳しく描くことを可能にした。しかしもう一方で、地域社会の範囲を任意に決めてしまい、結果的に地域を限定的に描くことになる危険性をもつことは、しばしば指摘されてきた。平常時に地域社会の研究方法を検討するときには、調査者による地域社会の定義が詳しく問われてきたのである。

一方で、東北地方太平洋沖地震を含め、被災地で人びとの生活を復旧し、また生活文化を伝えていく動きのなかでは、地域コミュニティがアプリアリナ存在として立ち現れることが多い。たとえば被災地域でのとりあえずの生活復旧の手段として仮設住宅がつくられるとき、そこに入居する人びとは基本的に被災前の地域社会に属していた人びとが集まることが理想とされる。そして被災によって傷つき分断しそうな地域コミュニティを復旧し維持するためにさまざまな催しがおこなわれる。

三陸地方の広い範囲でさかんな虎舞などの民俗芸能は、災害後の活動がマスメディアに取り上げられ、地域コミュニティの復興の象徴として取り上げられてきた。民俗芸能の復活を地域コミュニティの復興の象徴として取り上げる視点は、地域コミュニティを均質な集団とみなす。そして均質な集団の象徴としての民俗芸能の復活は、地域を元気づけ、復興に向けた動きを加速させるきっかけとして位置づけられる<sup>(7)</sup>。

実際、被災地域における復興のプロセスのなかでは、伝統的な社会関係が維持され蓄積された地域ほど、復興の速度は早いとする復興モデルが用いられることも多い。つまり行政を頂点として

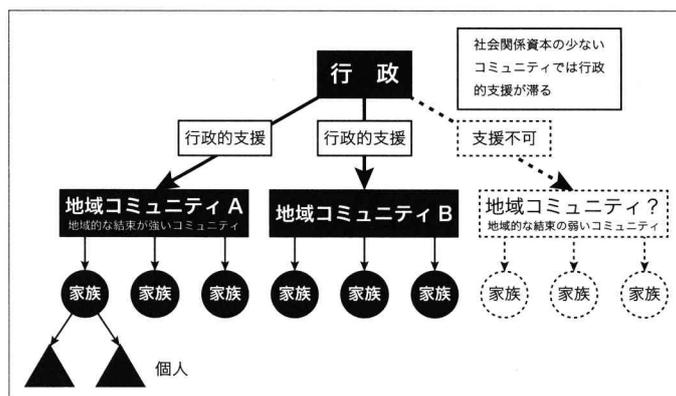


図1 行政を頂点とするコミュニティ・家族・個人のヒエラルキーモデル

NPO やボランティアなどのインフォーマルなセクタを媒介として地域コミュニティにアプローチし、その下部に各家庭と個人を配置するモデルを用意するのである(図1)。このモデルは、伝統的な社会で人間関係が密な社会ほど、行政による意思や通達、政策を迅速に個人にまで浸透させることができるとする。

伝統的で人間関係が密な社会を

重視する視点は、アメリカの経済学者ロバート・パットナムらが整理し提唱したソーシャル・キャピタルという議論を下敷きにしている。ソーシャル・キャピタルは社会関係資本とも訳される。この議論では、伝統的で人間関係が密な社会ほど、政策が末端まで行き届きやすいとする [パットナム 2001]。

この議論の意味するところは、どのコミュニティに投資をするのがもっとも地域社会の変革や政策の浸透をうながす上で効率的であるかということである。逆にいえば、長い期間をかけても社会関係資本が十分に育たなかったり、組織の成立後間もなかったりするコミュニティでは、社会変革のための投資をするには向かないと判断されて、投資の対象から排除されてしまうことも想定できる。

するとソーシャル・キャピタルの議論が提供する視点は、政治や行政の問題として、起きた事態に対して優先順位をつけて対応しようとする緊急時にはある程度の意義はありうるだろう。しかし民俗学や人類学のように地域社会を描き、そのなかに生じた論理を考察しようとする分野においては、ソーシャル・キャピタルと言いつつ表されているものの中身を具体的にあらわにしていくことが必要となる。

## (2) 多様に結ばれる社会関係

そこで改めて、地域コミュニティのなかで個人や家族がどう位置づけられるかを検討しよう (図2)。図2は個人と家族を起点に地域内外の個人、集団とさまざまに結ばれる関係性を表している。現代の個人や家族は地域社会に属し、同時に地域社会を越えてさまざまな関係性を結びながら生活をしている。

たとえば個人や家族は、集落や消防団、親族などと関係性を築いている。しかし個人や家族がつくり出す関係性は、道路が整備されモータリゼーションが進んで移動距離が相対的に増えた現代では集落に留まらない。3章で述べるように、モータリゼーションが起こる以前にも、人びとは広い範囲に関係性を築いてきた。しかし日常的な関係性の範囲は、モータリゼーションによって相対的に広がっている。そのため集落を越えて、場合によっては市町村や県の単位を越えて、職場や学校、友人など広い範囲に関係性が築かれる。

さらに現代では外部社会とのつながりは研究者の介入や被災地や過疎・高齢化地域にみられるようなNPOやボランティアとの関わりも想定される。そしてインターネットにおいてソーシャル・ネットワーク・サービスが広がりを見せる現代では、直接的で空間的なつながりを越えた人のつながりも想定できる。長らく会うことがなかったり、一度も会ったことが

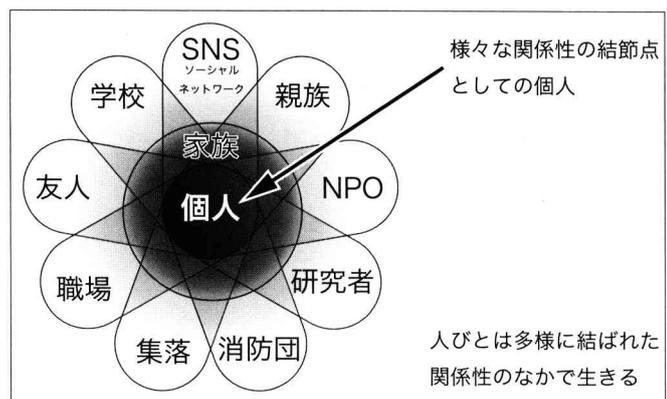


図2 多様な関係性によって成り立つ地域モデル

なかったりする人びとも何かしらの共通の話題やきっかけを手がかりにバーチャルなメディアをつかってつながりをつくることができる。

また図2には表さなかったが、自然と人の関わりのように、地域の環境と関わることもまた人びとにとっての関係性である。つまり人びとがある地域に住み生活することは、人—人、人—自然とのさまざまな関係性を築いていくプロセスである。

一方で、こうして描かれる関係性は一見、共時的である。しかしこの関係性は経済的な状況や政治・政策、文化、自然環境の変容のなかで破棄されたり、新しく構築されたりする。つまり関係性は一回できあがってしまえば、不変なのではなく、状況に応じて再構築していくものである。この点について、以前、筆者は日本の漁業の戦後70年にわたる変容を検討して、日本の漁業が政治や経済、人びとが生業の現場でつくる社会関係、そしてそれを支える資源や自然に対する理解のなかで規定されたり規制されたりしながら、変容してきたことをあきらかにした〔葉山2013a〕。地域社会をとりまく変化は不断のものであり、地域社会における関係性は通時的な視点からみれば、つねに変容し続けるのである。

すると人びとの関係性の有り様を丹念にあきらかにし、その関係性の変容を検討することは、地域における人びとの生き方、選択の変容をあきらかにすることにつながる。つまり関係性に注目することは、地域の関係性そのものを描くことではなく、その関係性の先にみえる人びとの実践や選択、そしてそこに現れる人びとの生活の論理を描くことにつながるのである。

以上の議論を踏まえて、以下では歴博の活動の特徴について検討し個人住宅を対象とした活動をする意義をあきらかにした上で、その活動から社会関係についてどのようなことがあきらかにできるのかについて尾形家を事例にみていこう。

### (3) 歴博の活動の特徴と個人住宅を救援対象とする意義

本稿の冒頭に述べたように、歴博の活動は個人住宅を対象としていることが特徴である。文化財レスキュー活動は、基本的には公共の利益に合致した範囲でおこなわれるものである。この観点からすると個人住宅を対象とした活動は、公共の利益に反する活動にもみえる。実際、専門家の間からも特定の個人住宅のみを対象とすることへの批判はあった。「なぜ尾形家なのか」「なぜ一軒の家にこだわるのか」という問いは研究者のみならず、マスメディアや地域の人びとからも繰返し問われた。

では個人住宅にこだわり続ける理由はなんだろうか。すでに本章の(2)で図2を示してくわしくみたように、地域に住むことは内外との自然(資源)や人間に働きかけて関係性をつくることによって成り立つ。すると、一軒の住宅を対象としてそこに形づくられる関係性に注目することは、その住宅を結節点として多様に結ばれる関係性にアプローチしていくことにつながる。一軒の個人住宅で生活用具・民具・文書・建材を瓦礫から拾いだす活動は、個人住宅のみで完結する閉じたものではなく、個人住宅を起点として広い時間と空間の広がりにはアプローチしていくものなのである。

以上のような視点で個人住宅にアプローチするとき、地域の物質文化を救うという活動は人びとの生活の有り様、生き方、そしてその場所に住むに至った経緯などを具体的にあきらかにしていく可能性を開く。それは山口弥一郎が1933(昭和8)年の津波から10年後に『津浪と村』〔山口(石井,

川島編) 2011] を著し、三陸の人びとが高台に移転したあと、やがて低地に戻ってしまう原因を生活者の視点から検討しようとした試みともつながる。以下では、気仙沼市小々汐・尾形家における活動の過程と、活動で救った物質文化から読み取れることを検討しよう。

### ③……………地域の中心的存在としての小々汐・尾形家

小々汐・尾形家は宮城県気仙沼市小々汐の旧家である(写真1)。気仙沼市は宮城県の北端にあり、太平洋から13キロメートルに渡って深く切れ込んだリアス式地形の気仙沼湾を抱く地域である。小々汐は気仙沼湾の東側、市街地の反対側にある集落である(図3)。

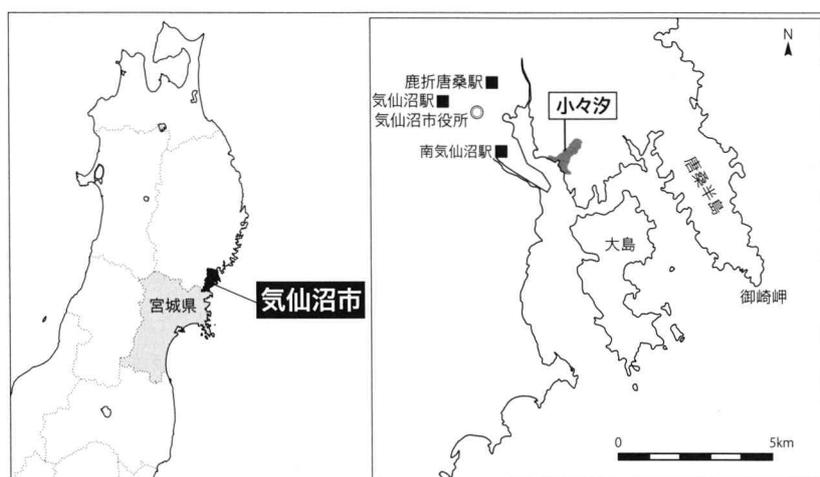


図3 小々汐の位置



写真1 被災前の尾形家住宅(国立歴史民俗博物館 勝田徹氏撮影)

気仙沼湾の東側は鹿折の平地から山際と谷を縫うようにして開けた小さな平場が続く。小々汐はその一角の小高い山の迫る小さな谷を中心にして、海岸沿いの小さな平場と丘に広がる集落である。東北地方太平洋沖地震が起きる前の小々汐は、戸数が56戸の集落であった。集落を構成するほとんどの家々は尾形家と親戚関係、または姻戚関係にあることになっている。小々汐はいわば同族があつまってきた集落である。

尾形家は小々汐の<sup>おおい</sup>大家とよばれ、小々汐の集落をまとめてきた総本家である。尾形家は地域の経済や政治、文化について中心的な役割を担ってきた。この家は藩政時代の中期以降、イワシ網漁の網元として発展した。同時に尾形家は藩政下で仙台藩の<sup>きもり</sup>肝入を務め、また明治以降は鹿折村という<sup>ししおり</sup>当時の小々汐を含む村の村議会議員、村長などの役職に就くなど、政治的にも地域の中心となってきた。そして地域の経済や政治の中心を担うことは、地域の文化的な結節点としての役割を担うことを意味していた。

## (1) イワシ網漁で発展して山を降りた尾形家

尾形家が発展するきっかけとなったイワシ網漁は藩政時代の中期にはじまり、ノリ養殖がさかんになる昭和初期まで続いた。この地域のイワシ網漁の発展は、2つの経済的な要因によって支えられていた。ひとつは今日の気仙沼のシンボルともなっているカツオ一本釣り漁のエサ需要である。そしてもうひとつは当時の農作業に必要な肥料の需要である。カツオ一本釣り漁ではエサとして、大量の生きたイワシを必要としていた。また農作業の肥料の多くはメ粕であり、その原料はイワシであった。

気仙沼市史によれば、藩政時代の中期1675（延宝3）年に紀州、現在の和歌山県から来た漁師が<sup>しびたち</sup> 鮪立の古館家に一本釣りの漁法、<sup>こだて</sup> 鱧節の製造方法などを伝えた〔気仙沼市史編さん委員会1997〕。カツオの漁法が鮪立に伝わったことをきっかけに気仙沼でカツオの漁獲量が増えると、カツオ一本釣り漁につかうエサとしてイワシが求められるようになった。その需要を満たすために、鹿折地区にある<sup>おおうら</sup> 大浦・<sup>かじがうら</sup> 小々汐・<sup>つるがうら</sup> 梶ヶ浦・<sup>しかはま</sup> 鶴ヶ浦の4つの集落からなる四ヶ浜でイワシ曳き網漁がさかんになった〔川島2012〕。

カツオ一本釣り漁のエサにつかわれるイワシは、夏の一時期にのみ必要とされた。イワシ網漁には夏網と冬網があり、それぞれ権利をもたなければイワシをとることができなかった。夏網はおもにカツオ一本釣り漁のエサにつかうイワシをとる網漁である。一方、冬網でとれたイワシは畑の肥料につかうメ粕に加工していた。メ粕は気仙沼の間屋を通して江戸に送られる商品となっていた。尾形家は夏網と冬網の両方の権利をもって、藩政時代中期以降、1年を通してイワシ漁をすることで生計を立ててきた〔気仙沼市史編さん委員会1997〕。

聞き取りによれば、このイワシ網の成功により尾形家は高台にあった住居から小々汐の谷に移すこととなったという。尾形家は1810（文化7）年に、小々汐の谷に家を建てた。それが今回の東北地方太平洋沖地震で被災した尾形家住宅である。1810年以来200年間、尾形家は海の端で暮らしてきた。

## (2) 地域の政治的中心としての尾形家

尾形家は藩政時代には肝入という役職についていた。肝入は一般的には庄屋や名主にあたる役職である。地域の人びとから租税を徴収する仕事のほか、戸籍の整理や地域で工事をするときの人夫の手配、人びとの請願を藩に伝えるなどの仕事をし、仙台藩と地域の人びとをつなぐ役割を果たしてきた。当初、肝入は代官が直接に村の有力者を指名するものであったが、のちにはムラの寄り合いを通じて合議で決められるようになったという[気仙沼市史編さん委員会 1990]。選出方法は変わっても、尾形家は地域の有力な家であり、かつ地域の経済的な中心でもあり続けたことで、肝入の役職を続けた。

小々汐の総本家、大家としての尾形家は、上記のように藩政時代を通じて政治的な役割を期待されてきた。明治時代になると、その役割は選挙で選ばれた人が担うものになったが、尾形家はそこでも政治的に地域の中心であり続けることを求められていた。そこで尾形家の人びとは政治家として立つことになった。

尾形家の先々代当主であった尾形貞七氏は当時、小々汐を含む地域にあった鹿折村の村議会議員を歴任し、1905（明治38）年から1907（明治40）年までと、1917（大正6）年から1918（大正7）年にかけて村長となった。村長の在任中は小々汐の尾形家住宅は村役場としての役割を担い、多くの人びとが入り出したとされる。また政治家であるということは、家に多くの客が訪れる機会が増えるということであった。

## (3) 文化の結節点としての尾形家

生業活動や政治の上で重要な任を担っていた尾形家には多くの人びとが入り出し、そこに集落内外の人びとを巻き込んだ生活文化が形づくられてきた。

尾形家に入り出す人びとを巻き込んできた生活文化の例を御札、オシラサマ、薬箱を例にみてみよう。尾形家は住宅の屋根裏に大量の御札を保管していた。このことは、2011年3月の被災前から知られていたが、被災後改めて瓦礫のなかからみつけだされた。木札、紙札ともに大量に残っていたが、とくに瓦礫から救ったもののなかでは木札の保存状態がよい。御札の多くは海上安全や家内安全などを祈願したものである。

御札に書かれた寺社名をみると、気仙沼市唐桑の御崎（日高見）神社や気仙沼市松岩の寺などの地元の寺社に混じって、日本海側の山形県遊佐町にある鳥海山大物忌神社や岩手県紫波町にある紫波稻荷神社、同県陸前高田市にある氷上神社、宮城県大崎市にある斗笠稻荷神社など場所が特定できる神社の名前が確認できる。このほかに場所は特定できないものの、山形県の出羽三山との関係が深い出羽神社、月山神社、湯殿山神社の御札や金華山神社、西宮神社などの神社名を読み取ることができる。

これらの御札は、少なくとも尾形家を取り巻く信仰圏を物語っている。御札の存在がすぐに、尾形家の人びとの移動に結びつくわけではない。むしろ尾形家を訪れた宗教者が書いた御札や尾形家の人びとがゴシンルイ（御親類）<sup>(9)</sup>とよんできた人びとが、参詣の土産として尾形家にもたらした御札も多いと考えられる。

尾形家に御札を運んだ人びとはすでに他界しており確かめようがないが、『気仙沼市史 VII 民俗・宗教編』には小々汐を訪れて1891（明治24）年亡くなった宗教者、六部のことが書かれており〔気仙沼市史編さん委員会1997 p.168〕、宗教者の出入りが確認できる。気仙沼市史に記録のある六部は、広島県上石郡安田村の出身で妻子を伴って小々汐を訪れたという。そこで病死してしまうのであるが、尾形家では墓をつくってこの六部をともらったという。記録によれば、仙台藩は藩政時代を通して旅の宗教者を家に逗留させることを禁じる御触れを出していた〔気仙沼市史編さん委員会1997 p.164〕。このことは数多くの宗教者が、仙台藩が治める三陸一帯を訪れていたことを示している。

これらの記録と合わせてみると、尾形家から大量にみつかった御札は、信仰をキーワードとする人びとの関係性を表象したものだといえる。つまり尾形家を起点としてみると、信仰を介して多様に結ばれる社会関係をみることができるのである。

同様に地域内の社会関係を表すものに尾形家のオシラサマ信仰や薬箱の存在がある。オシラサマは尾形家というイエのカミであり、同時に小々汐という地域のカミでありつづけた。尾形家ではお正月にオシラサマを納めていた箱から出してお供えをして祀った。このとき、ゴシンルイの女性たちを中心に尾形家を訪れてオシラサマを拜んでいた。血縁関係や姻戚関係をもつ人びとがあつまってきた小々汐の集落では、総本家である尾形家で家の繁栄を祈って祀るカミは、同時に関係する家々にとっても重要なカミだったのである。

薬箱に関して小池淳一は、交通網が整備され鹿折や気仙沼の町に出て行くことが容易になる以前、尾形家は地域の薬局としての役割を果たしていたことをあきらかにした〔小池2012〕。尾形家には富山県富山市の売薬商、有澤作太郎と書かれた薬箱が残されていた。この薬箱は尾形家の階段たんすの引き出しにしまわれており、2011年5月12日に瓦礫から発見された。

小池の聞き取りによれば、有澤作太郎は1950年代後半まで尾形家を訪れており、尾形家を起点として四ヶ浜に薬を売って歩いていたという。そして小々汐では有澤作太郎は尾形家にもってきた薬を置いていき、尾形家は必要に応じて集落の家々に薬を渡し実費をもらっていた。流された尾形家住宅から見つかった階段たんすには有澤作太郎の記名のある薬箱のほかに、秋田県阿仁の熊の胃や奈良県橿原の胃薬、馬の薬などが残っていた。これらの薬からは、尾形家にやってくる商人たちの行動範囲や集落内の人間関係などを読み取ることができる。

以上の御札やオシラサマ、薬箱の例にみられるように、尾形家は経済や政治の中心を担い、その関係性のなかで培われる生活文化の結節点を担い続けてきた。尾形家がイワシ網漁をはじめとする漁業経営から離れ、また道路が整備されて簡単に街に出て行けるようになったことや生活改善運動の影響などを受けて、現代では集落内でとりおこなわれていた年中行事は簡略になりつつあったが、尾形家はなおも集落の人びとを結びつけ続ける役割を担っている。

#### (4) 津波と尾形家住宅

尾形家住宅は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による津波で、およそ100メートル流され倒壊した（図4、写真2）。しかし尾形家住宅にとって津波はこれが初めての経験ではなかった。少なくとも聞き取りと残された資料から、昭和以降3回、津波に遭っていることがわかっている。被害が聞き取れる範囲の1回目は1933（昭和8）年の津波である。このときには先代当主の弟であ

る尾形栄一氏によって、地震の発生から津波の到来、避難、そしてその後の復旧までの過程がこと細かく日記に記録されている。1933年の津波に続く大きな津波は1960（昭和35）年のチリ地震津波である。

これらの津波で尾形家は床上まで海水が浸水し、生業に関わる道具が流されるなどの被害があっ

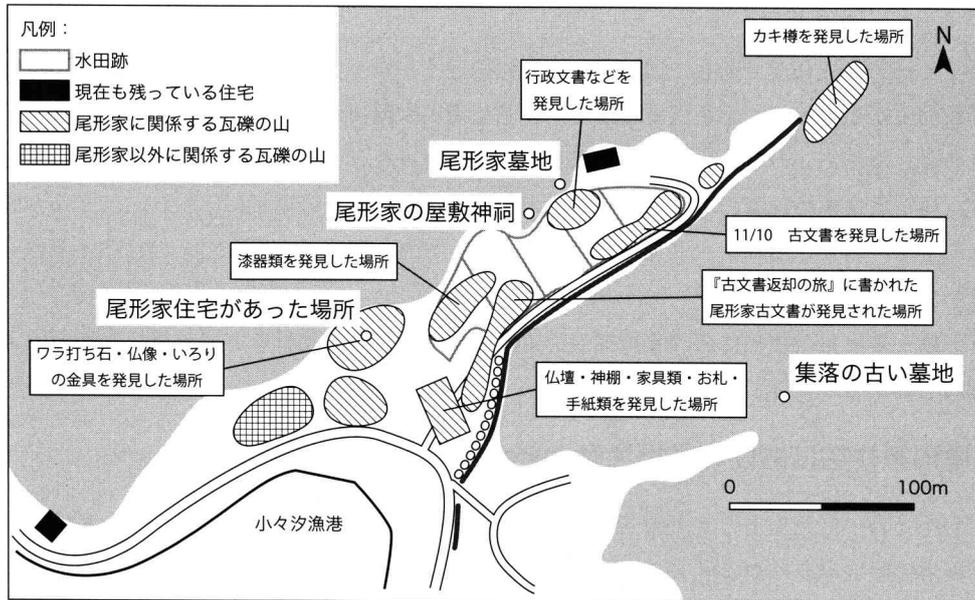


図4 尾形家の生活用具・民具・文書類などの行方



写真2 被災して屋根だけが残った尾形家住宅

た。こうした被害にもかかわらず尾形家は海に近い谷間の土地に居を構え続け、2011年3月11日を迎えた。

2011年3月11日、宮城県の牡鹿半島沖で発生した津波は気仙沼湾に到達し、尾形家のある小々汐の集落も大きな被害を受けた。高台にあった数軒を除くほとんどの家屋が津波による被害を受けた。集落内でも亡くなる方が出るなど、被害は甚大であった。

1810年築の尾形家住宅も津波によって浮き上がり、一度谷のなかに押し流されたあと、再び海に向かって押し出された。そして尾形家住宅は海の近くに建っていた集会所とその前にあった電信柱に偶然引っかかって行く手を阻まれ、かろうじて海への流出を免れたが、居住部分が倒壊して屋根だけの姿となった。のちに生活用具、民具、文書、建材などを救う作業のなかでわかったことであるが、尾形家住宅の母屋のなかにあったものの多くは、尾形家の屋根に守られ、ほとんど間取りどおりのまま、およそ100メートル移動していた。一方で、母屋になかったものは小々汐の谷全体に散乱していた。

以下では、被災した住宅における被災生活用具・民具・文書・建材などの救援活動がどのように進められたのかをみていこう。

### (5) 尾形家住宅における救援活動の経緯

歴博が小々汐・尾形家とかかわりをもつようになったのは2008年である。当時、歴博の第4展示室「民俗」の展示をリニューアルに向けた調査が進められていた。そのリニューアルの目玉のひとつとして、日本の祭祀・儀礼空間としての民家を再現展示する計画が進んでいた。その対象とし



写真3 瓦礫を撤去する (国立歴史民俗博物館 内田順子氏撮影)

て歴博が選んだのが小々汐・尾形家住宅であった。被災前にお盆とお正月を中心に各2度の調査を行い、年中行事のやり方や年中行事のなかで用意される行事食などについて記録をしていた。ただし再現模型をつくるための採寸や各月におこなわれる年中行事の調査などはこれからという状況のなかで尾形家は被災した。

被災後1ヶ月ちかくが経った2011年4月初旬に尾形家を訪れて被災状況を調査し、所有者の意向を踏まえて改めてできる範囲で再現模型をつくり、公開をめざすこととなった。そして4月下旬に再び、現地を訪れた際に、被災して谷全体に散乱してしまった生活用具や民具、文書、建材などを拾うこととなった。そして5月のゴールデンウィーク中に本格的な活動にとりかかり、同年10月末に小々汐地区の瓦礫撤去が一応終わるまで活動は続いた(写真3)。また救ったものを洗浄し、整理番号などを施してリスト化した上で安定的に保管できる状態にする作業は6月下旬以降、気仙沼市教育委員会の方々力を借りて進んだ。現在、尾形家から救ったものは2013年12月現在19,000点を数え、なおも整理が続いている。

#### ④……………物質・場所が身体を通して喚起する記憶 —ワラ打ち石の発見をめぐる

3章では尾形家を対象とした文化財レスキューを通じて被災の現場から救った物質を通してみえる社会関係に焦点を当てた。3章で扱った内容は、物質という救出活動の結果から見通すことのできる社会関係である。

以下では、この物質を救う活動のプロセスに焦点を当てる。文化財レスキューという活動は、救った結果自体にも意義はあるが、それと同時に救う過程そのものにも地域の生活文化を考える上で重要な観点があるからである。本章では尾形家を対象とした文化財レスキュー活動の過程で探ることになったワラ打ち石とよばれる石の救出をめぐる起きた出来事をくわしくみていこう。

##### (1) 尾形家の年中行事とワラ打ち石の行方

築200年の尾形家住宅の土間の上がりかまちの近くには、ワラ打ち石とよばれる石が埋められていた(写真4)。この石はワラ細工などをつくる日々の暮らしのなかでつかわれてきたものであると同時に、年中行事のなかでもつかわれてきた。尾形家の年中行事では、2度、ワラ打ち石をつかう行事があった。

その年中行事はそれぞれノウハダデ<sup>(11)</sup>とススハキとよばれる。ノウハダデは一年の農作業のはじまりに行う年中行事であり、集落のゴシんルイがあつまりワラ打ち石をつかってワラを打って柔らかくし、一年間つかう縄をなつた。この年中行事は旧暦の1月11日におこなわれた。

一方、ススハキは正月を迎える準備をする行事である。ススハキでは家中をそれぞれ男性のゴシんルイが分担して掃除し、一方で女性のゴシんルイは尾形家の母屋でつかっている食器や調理器具などを全て洗う。その後、男性のゴシんルイたちはワラ打ち石をつかって正月につかうしめ縄をつくり、女性のゴシんルイたちはススハキ餅をつく。これらのワラ打ち石をつかった年中行事は、一見すれば単なる作業のようであるが、改まった儀礼的な要素をもち合わせていた。そして、これら



写真4 土間にあったワラ打ち石(国立歴史民俗博物館 小池淳一氏撮影)

の年中行事のなかでつかわれたワラ打ち石は、生業活動や生活のなかで象徴的な存在であった。

このワラ打ち石は東北地方太平洋沖地震の津波をきっかけに2度にわたって所在不明となった。1度目は津波で尾形家住宅をはじめとする集落全体が流されてしまったときである。このとき、ワラ打ち石は大量の瓦礫の下にあった。2011年7月にはそれらの瓦礫を取り除いてワラ打ち石を見つけた。発見後、このワラ打ち石は家ができた当初から動かずにあったことと、工学院大学の建築学の専門家を中心とする再建プロジェクトがあり検証の必要があったことを考慮して、現地に保存していた。

しかし2012年3月、瓦礫撤去の業者によって誤ってワラ打ち石があった場所が重機で整地され、再びワラ打ち石を見失ってしまった。結果的に2度見失い、2度発見して、最終的に掘り出して気仙沼市の文化財収蔵庫となっている旧月立中学校の校舎に運ばれた(写真5)。

前章でもみたように、生活のなかでつかわれていたものの発見は、人びとの思い出や記憶を救い出すだけに留まるものではなく、地域に生きてきた人びとの社会関係や自然との関わり方をあきらかにするきっかけとなることであった。そして関係性の変容を検討することは、地域の人びとの生き方を検討することにつながる。この石を発見する2度の過程もまた、思い出としてのモノ探しではなく、物質や場所が喚起する人びとの関係性の作り方、身体を通してつくられた経験の有り様、そしてそこにみえる人びとの生き方につながる要素をもっていた。

以下では、この2度のワラ打ち石の発見について詳しくみていこう。なお、以下は歴博の特集展

示の図録『特集展示一人間文化研究機構連携展示 東日本大震災と気仙沼の生活文化(図録と活動報告)』[国立歴史民俗博物館 2013]の解説「モノの救出から物語の救出への展開—気仙沼市小々汐・尾形家住宅における活動を事例に」[葉山 2013b]で詳しく言及しているが、本論の根幹に関わる事例で重要であることから、とくに2回目の発見を中心に紹介する。



写真5 2度目の発見のあと掘り出して収容したワラ打ち石

## (2) 1回目のワラ打ち石探し

母屋の下に積み重なった瓦礫のなかから信仰や生活のなかでつかわれていたもの、そして家で重要視されてきたものを救い、大方の片付けが終わった7月、次の活動の目標としてみつかっていなかったワラ打ち石を探すことになった(写真6)。

しかし現場にいた歴博のメンバーはワラ打ち石を見たことのない人ばかりで、写真や見た人たちからの話で漠然と知ってはいても、くわしいことがわからなかった。そこで尾形家のご当主の奥さ



写真6 ワラ打ち石があると推定された場所、瓦礫が堆積している(国立歴史民俗博物館 内田順子氏撮影)



写真7 ワラ打ち石の位置を描く(国立歴史民俗博物館 内田順子氏撮影)

んにワラ打ち石の場所を尋ねることになった。

このとき、奥さんはすでに忘れかけていた記憶を現場に行くことと棒切れで家全体の図を描くことで思い出していった。奥さんはまず現場に立ち、場所の予想をして特定しようと急ぐ私たちの前で、家の裏にあった大きな2本の杉の木の位置と基礎部分が残った住宅の離れの位置をみながらワラ打ち石がある、およその場所を示した。

示された場所とそのまわりにあった瓦礫を撤去するのに2週間ぐらいの時間がかかった。やっと元の地面に到達できるところまで瓦礫を撤去したあとで、もう一度、奥さんに場所を訪ねて家の全体とワラ打ち石のあった場所の関係を地面に木の棒で描いていただいた(写真7)。

以上のやりとりのなかから、いくつかあきらかになった点がある。一つは物質や場所が失われると、その場所や物質を媒介して記憶されていた事柄が簡単に忘れられていってしまうことである。同時にその記憶をたどる手がかりとしてつかわれるのもまた、何かしらの物質や場所であるということである。

つまり奥さんが場所を示すためにつかったのは、被災前にあった特徴的な杉の木や無くなってしまった家の痕跡であり、それらの関係性のなかからかろうじて記憶がたどられているのである。それらの関係性は意識して記憶されているものではなく、問われることによって、また必要となることによって場に生起してくる記憶である。一方で問われない、もしくは必要とならない場合には思い出されずに消えていくこともあり得るということだろう。

### (3) 2回目のワラ打ち石探し

1回目のワラ打ち石探しのなかで述べたように、人びとの具体的な記憶は物質や場所とともに記憶されている。2012年3月に再びワラ打ち石を見失い、2012年6月に再びワラ打ち石を探したときには、その物質や場所と人びとの記憶の関係について、さらに興味深い出来事が起きた。

2012年3月、ワラ打ち石が失われたとき、2つの可能性が考えられた(写真8)。業者は家の礎石を全て尾形家の敷地であった一角にあつめていた。このことから、1つはすでに掘り返されて石の集積場に寄せられている可能性があった。もう1つは地中に埋まったままになっている可能性があった。

そこで見失った直後に集められた石の山を崩しながらワラ打ち石を探したものの、そのときには見つからないままになった。

それから3ヶ月が過ぎた6月、再び歴博のメンバーだけでワラ打ち石を探すつもりで小々汐の尾形家の敷地に立ったところ、尾形さんの奥さんと息子さんとに再びお会いすることになった。そこでもう一度、ワラ打ち石を探すために協力をお願いした。キャタピラーの跡だけがくっきり残る尾形家住宅の跡地でしばらく歩き回っているうちに、奥さんがかつての住宅の勝手口の両側にあった2つの水道の栓をみつけた。これらの栓は地中に埋まっており、機械による整地でも動かなかったことが予想された。

そこでその栓を基準にして、奥さんが、家が建っていたときのように勝手口から歩いて家のなかの構造物の位置を特定していった。まず「ここが台所のハコがあったところで」といいながら、奥さんが尾形家に嫁入りしたあとにつくった台所のあった場所を特定し、台所のハコの分だけ歩き、次に台所のハコから少し凹んだ部分にあった土間の上がりかまちの端まで歩き、「ここに台所の囲炉裏があって、板の間がこれくらいの大きさで」といいながら土間の上がりかまちの位置を特定した。最後にワラ打ち石は土間の上がりかまちの角にあったことから、その位置を「たぶんこのあたりだと思います」と指差した。そこで筆者がスコップでその場所を掘ろうとして、指差した場所にスコッ



写真8 整地されてキャタピラーの跡が残る尾形家住宅の跡地

プを置いたとたんに、スコップの先からカツンという音がして、ワラ打ち石が見つかった（写真9）。

石の頭の部分が地中から掘り出されてあらわになったところで、尾形家のゴシシルイの男性がやってきた（写真10）。男性は「何をやっているんだ」といいながら、我々に近づいてきて、石をみた瞬間に「あれ？この石、オラが叩いていた石じゃないか」と声を上げた。その声に続けて話されたのが本章の冒頭で述べたワラ打ち石をめぐる尾形家の二つの年中行事、ノウハダデとススハキの話である。

ゴシシルイの男性の話はノウハダデの行事についての説明に留まらず、さらに具体的な過去の一時点の出来事に広がっていった。最初、話はノウハダデの日に小々汐の10軒のゴシシルイが集まったこと、そして力のある若い人たちがワラ打ち石をつかってワラを叩いて柔らかくし、年配の人びとがワラをなうという一般的な説明にはじまった。

次にススハキの日の話になり、ある年、ススハキに遅れていったときに尾形家のはしごをつかって部屋の上に登って柱をつかむと冷たい感触があったのでよくみるとヘビをつかんでいたの、殺そうと思ってヘビをつかみ直したところ、尾形家の先代の当主に「そのヘビはうちの守り神だから殺さないでくれ」と言われてヘビを逃がした話や、ススハキの日に女性たちがつくるススハキ餅が美味しかった話などが披露された。

話はさらに土間で起こった事件にも展開した。ある年に漁業権問題で近隣の集落ともめ事になったことがあったのだという。そこでちょうどススハキの日にバスに乗って陳情に出かけようということになり、尾形家に10軒のゴシシルイを中心に集落の人びとがあつまっていた。そこに漁業権



写真9 2度目にワラ打ち石が見つかった瞬間（国立歴史民俗博物館 川村清志氏撮影）



写真 10 ワラ打ち石をめぐる物語が語られる場 (国立歴史民俗博物館 川村清志氏撮影)

問題を伝え聞いた新聞社の記者が自転車に乗ってやってきたのだが、海に突き出してL字型に曲がっていた港の道に気づかずに誤って海に落ちてしまったのだという。そこでみんなで記者を海から助け上げて、ひとまず休ませるために尾形家に連れて行き、普段は先代の当主が座る場所に座らせて、当主の衣類を着せて暖めた話が披露された。その話をするとき、ゴシルイの男性はワラ打ち石の場所から上がりかまちを跨ぐようにして囲炉裏のあった場所まで行き、ちょうど新聞社の記者が座った位置に立った。

このエピソードには注目すべき点が2点ある。1つは尾形家の奥さんが場所を特定するのにつかった基準とそれにもとづく身体に刻まれた経験的な記憶である。もう1つは具体的な物質が現れることによって生起する人びとの記憶の問題である。ここに長々とワラ打ち石を発見したプロセスとその発見をきっかけに語られた話を記述したのは、物質や場所を前提として立ち現れる言葉や語りを検討したいと考えたからである。

前者についていえば、身体的な記憶をたどるという行為は、1回目にワラ打ち石を探したときのエピソードと同様に身体や物質、もしくは人の記憶単独で成立するものではなく、場所や物質をきっかけとして現れるということである。このことは逆に考えれば、物質や場所がなければ蘇りにくい記憶があるということでもある。

同じことはゴシルイの男性の語りにもみられる。ゴシルイの男性にとって、我々がワラ打ち石を発見したことは、ワラ打ち石を中心にして、その場所で起きた出来事の記憶を鮮明に思い出すきっかけとなった。このことは物質があることで記憶を喚起することがあるということである。以下ではもう少し詳しく、物質と場所と身体と記憶の関係性を検討してみよう。

## ⑤……………考察—物質文化の救出が地域開発の文脈のなかで担う意義

本稿では、1章(1)では地域開発の視点を早くに民俗学のパラダイムに取り入れて、実践的な地域開発の手法を検討した宮本常一の議論を紹介した。宮本がめざした地域開発の議論は、地域の人びとが地域を外部に対して開き、そこにいかにして新たな自己像を発見するかに主眼を置いていた。こうしてみると、地域開発の議論は個人や個人が所属する地域の自己像をどう描きうるのかという点で、被災地域の生活復旧とも視点が結びつく。

さて、その被災地域の生活復旧を論じる論点として、本稿では2章(1)で、パットナムらによるソーシャル・キャピタルの議論が扱ってきたコミュニティ像に触れ、コミュニティを一枚岩として捉えることの限界を論じた。そして個人の経験がコミュニティに回収しきれない可能性を指摘し、津波による被災の前から現在に至る人びとの生活を論じる上では、個別具体的な人びとの営みとそこに生じるさまざまな関係性に注目していく必要があることを確認した。

以上のことを踏まえて、被災地域での生活復興への取り組みの事例として文化財レスキュー活動を取り上げた。そして個人住宅を対象とした活動で救った物質から読み取ることのできる社会関係について検討し、その物質を救うプロセスにも焦点を当ててきた。またプロセスのなかで、物質を媒介として生じる語り・記憶について論じた。前章ではその語り・記憶が物質と場と身体と密接に関わって生じていたことをあきらかにした。以下では前章で説明したエピソードについて、本稿における記憶の位置付けをあきらかにしたうえで、物質と場所と身体と記憶の関係性を検討しよう。

### (1) 文化財レスキュー活動における個人的な「記憶」

「記憶ブーム」[WinterJ. 2006]という言葉に象徴されるように、現代では戦争や震災などの記憶をめぐる歴史学や社会学、民俗学などで研究がさかんである。たとえば歴史研究ではオーラル・ヒストリーの扱いをめぐる、議論は深まりをみせる。

ピエール・ノラは「記憶の場」の議論で、「歴史」と「記憶」の関係を以下のように整理した[ノラ 2000]。ノラは、かつての共同体において「歴史」と「記憶」は一体のものであったとする。しかし近代化の過程で共同体に流通していた記憶と一体化した歴史は終焉を迎えた。その結果、歴史はナショナル・ヒストリーに代表される普遍性と客観性を担保された公的なものになっていった。一方で、記憶は歴史から乖離して次第に主観的で個人的なものになった。社会的存在としての地位を失った記憶は、社会に共有されることなく個別に増殖していき、公的な文脈からは排除された[吉田 2011]。こうした状況のなかで、ノラはモニュメントや場所などを歴史の対象として取り込むことによって、歴史のなかに記憶を位置付けようとした。

公的な歴史の文脈のなかで冷遇されてきた個の記憶であるが、現在、普遍性と客観性を担保した歴史に対する疑念から注目されるようになりつつある。そこでは個の記憶・経験の表象としてのオーラル・ヒストリーが重視され、事柄に対する矛盾した説明を容認する多声性の歴史という観点が生じた[安川 2008]。その結果、歴史研究においてピエール・ノラが乖離の過程として論じた「歴史」と「記憶」は再び接近しつつある。

これらの「記憶」をめぐる議論のなかで取り上げられてきたテーマに戦争や災害がある。ホロコーストの記憶や戦中の日本の活動に対するアジア各地における記憶、沖縄戦をめぐる生きつづける人びとの記憶などは、現在でも記憶研究のなかでは重要な位置を占めている。

また阪神淡路大震災では、震災の記憶をいかに未来に伝えるかが課題となった〔蘇理 2003, 相澤 2005〕。多くの人びとが震災を語り、それらは書籍などの公的な出版物や Web サイト、映像として蓄積された。また震災の記憶を集約し、震災に関わる多声性の歴史をアーカイブする施設として記念施設やモニュメントなどが数多くできた。その動きは東北地方太平洋沖地震を経て、東日本大震災をめぐる津波や原発事故の記憶をいかに伝えていくかという議論につながる。

こうした個の記憶の多声性を容認しつつ構築される戦争や震災の記憶は、アルヴァックスが論じた集合的記憶を形成していく〔アルヴァックス, 1999〕。集合的記憶の議論は「(1) 記憶は集団によって生まれ、(2) 集団は記憶によって生まれる」〔安川 前掲書, p.296〕ものであるとし、個人的な記憶は社会化の過程で獲得されるものとする。

アルヴァックスをはじめとする集合的記憶の議論は、個人の記憶が生じる背景としての社会とその個人の記憶によって再編されつづける受け皿としての社会についてあきらかにした。そしてそれらの議論は、多くの場合、表象された結果としてのテキストやモニュメントを分析の対象としてきた。しかし本稿が問題としてきたのは、記憶の表象としてのテキストやモニュメントだけではない。本稿で文化財レスキュー活動の可能性として扱いたかったのは、この記憶が物質や空間において析出してくるプロセスである。

文化財レスキュー活動で救われた物質は、地域の人びとの記憶を象徴的に示すアーカイブの役割をもつ。それは本稿の場合で言えば、小々汐という地域、あるいはもう少し広く、気仙沼という場所における震災前の生活の集合的記憶に接合する。人びとは失なった過去をアーカイブとしての物質を手がかりにすることによって個々の記憶を具体化していくことが可能になるのである。

すでに述べたように、文化財レスキューは物質文化の救援活動である。活動には博物館や資料館など、被災前に構成されたアーカイブを救う活動と個人住宅など個人のアーカイブを救う活動とがあった。

博物館や資料館などを対象とした文化財レスキュー活動は、いわば集合的記憶として地域のメモリアルの象徴となったものを救う。その目的は、被災前の集合的記憶としての地域の記憶を救うことであった。こうした活動は地域の記憶を未来につないでいくうえで欠かせない。

一方で、本稿が扱った個人住宅を対象とする文化財レスキュー活動には、アーカイブされたドキュメントを中心的に救い文字情報を中心に物質を残そうとする立場と、物質や場所を前にして人びとが記憶を言語に表象するプロセスを重視する立場という2つの立場があった。本稿は後者の立場である。

個人住宅の文化財レスキューにおける前者の立場においても、文書とともに民具が救出され、地域の生活文化を示すアーカイブとして保存された。しかし民具を中心とする物質文化の取り扱いには苦慮している。記述された言語という表象をもたない民具は、文書から地域を再構成しようとする試みのなかでは扱いにくいのである。

本稿で扱った後者の立場は、博物館や資料館の文化財レスキューや文書に力点を置いた個人住宅

における文化財レスキューではこぼれ落ちてしまう、人びとの個人的な記憶に注目したものであった。本稿で扱った個人的な経験や記憶にアクセスする後者の手法を用いることで、本稿4章で示したように、物質は地域で営まれてきた生活の個人的な記憶を引き出すことを可能にしたのである。こうした物質をきっかけとして生起する記憶は、当然のことながら物質自体に予め備わっているわけではない。物質が救われ、記憶が生起するプロセスに注目しなければ、物質をとりまく意味的世界にアプローチすることは難しいのである。

個人の住宅を対象とした文化財レスキューによって救われたものは、やがて地域の集合的記憶を構成するツールとしてモノメンタルな存在になるだろう。しかし、アルヴァックスがいうように個人の記憶が集団によってつくられるとしても、個人の記憶がすべて集団によって共有される集合的記憶に回収されるわけではない。また集団と個人の間には、上位としての「集団」と下位としての「個人」というヒエラルキーが存在しているわけでもない。集団と個人の関係は、2章でパトナムの議論を用いて論じたように、異なる位相なのである。

そして集団の記憶として共有される集合的記憶は、たとえば博物館や資料館、または震災モノメントとして残され、伝えられていく。そしてその集合的記憶の表象としての物質を前に人びとは個人的な記憶を思い出すことはあるだろう。しかし集合的記憶はそもそも、さまざまな人びとの個人的な経験と記憶とが、時間をかけて忘却されたり選別されたりして残ったものであり、その背後には取り上げられることなく消えてしまった多くの記憶が存在する。

こうした消えていこうとする個人的な経験や記憶をテキストだけでなく、テキストが生じるプロセスにまで踏み込んで扱うことは、地域の人びとの生き方を個人という位相からみるということである。そしてまた個人の位相にあった経験や記憶が、いかにして集合的記憶になっていくのかを追うことでもある。そこに個人住宅を対象として、個人的な記憶に重点を置いた文化財レスキューの可能性があるのである。

## (2) 説話研究の成果と現場から生じる語りの可能性

前節で述べた個人的な記憶に重点を置く立場は、民俗学のなかでは災害に関係なく重視されてきた。一方で、民俗学においては記憶をどう語るかという記憶の表象としてのテキストを重視する立場が強かった。人の記憶が個人の心意的な出来事であるとして、観念の問題として捉えるのである。その場合、災害に遭っても、人が生き残ることができれば、その人が捉えていた生活世界は復元できると考えられる。口承文芸の研究では、災害のあと被災地に行き、地域での被災前の生活のなかで人びとが培ってきた記憶や物語などを蒐集する作業を続けている。

記憶や物語などを蒐集する試みによって地域の人びとが災害に対してどのような経験的知識を蓄積したのか、またはどのような知見を得たのか、そして災害に対してどのような行動をすることが良いのかといった問題があきらかになる。たとえば石井正己がまとめた『震災と語り』[石井編 2012]や『聴く 語る 創る 第二十一号 特集東日本大震災を語り継ぐ』[日本民話の会編 2013]には、三陸で起きたこれまでの災害と東北地方太平洋沖地震による被災経験についての語りが集められている。そこには体験談や昔話として語られてきた津波に対する人びとの記憶や、今回の津波に対する人びとの対処の記憶が集められており、人びとの津波に対する経験的知識の有り様を知る

ことができる。

一方で語られたことを具体的に記述し、失われつつある事柄を具体的に検証するときには、物質や場所を通して生起する記憶は重要になる。ワラ打ち石の例からあきらかなように、人びとの生活の記憶を引き出そうとするとき、物質の存在が人びとの記憶をよび起こしている。このことは人びとの記憶が物質や場所における身体を通じた経験と切り離せないことを意味している。では具体的な物質や場所を通して、人びとの記憶はどのようにして生起していくのだろうか。以下ではその点を考察しよう。

### (3) 語りや記憶はいかにして生起するのか

人は経験した事柄を全て忘れずに覚えているわけではない。どれほど深く対象となる事柄に関わっていたとしても、条件がそろわない状況のなかでその事柄を克明に思い出せるわけではない。そのことは、尾形家が津波で被災したあと、尾形家のご家族に何度となく年中行事や生活の記憶を聞き取るなかで経験した。

尾形家は生活改善運動のなかでその形を変えていたとはいえ、比較的丁寧に年中行事を続けていた。したがって聞き取りをする側は当然覚えていることと判断して、くわしい話を聞こうとする。ところがしばしば、尾形家のご家族は行事のやり方を忘れていたということに出くわすことがあった。こうした経験を通してみると、人の記憶は経験の度合いによって明確になったり不明確になったりするわけではないことに気づく。ではどのようなときに、人は記憶を鮮明に思い出すのだろうか。

4章でワラ打ち石を発見する過程を紹介して検討したように、奥さんの記憶が鮮明になったのは、具体的な物質同士の関係性を検討したり、具体的な場所に立つ経験をしたりしたときだった。またゴシムイの男性がその場所で起こった事柄を鮮明に思い出していったのも、ワラ打ち石という物質をみたときだった。つまり手がかりをみつけたときに人の記憶はにわかに具体的に、そして鮮明になることがあることをこれらの事例からみてとることができる。

こうした状況は、ジェームス・ギブソンが展開したアフォーダンスの議論を彷彿とさせる。ギブソンは afford（～ができる、～を与える）という言葉から affordance（アフォーダンス）という言葉をつくった。この議論によると、アフォーダンスとは善悪を問わず、環境にあるあらゆるものは我々に提供する「価値」をもっているとする。しかしその「価値」は物理的性格ではなく、我々（動物）にとっての環境の性質である。そして「価値」はその環境にある我々（動物）が「獲得」し、「発見する」ものである〔ギブソン 1985、佐々木 1994〕。ギブソンは、状況のなかで行為者が発見し、価値があると考えることをアフォーダンスとよんだ。人びとは普段、自分のまわりにある物質の意味や意義、価値を認識しているわけではなく、必要が生じたときにその意味や意義、価値に気づくのである。

このことをもう一度ワラ打ち石のエピソードに戻って検討してみよう。当初、災害以前とは全く環境が変わってしまった状況のなかで、特定の物質を探そうとするとき、すでにあるものに情報を見出し、その情報をもとに関係性を構成し、そこに物質の存在を特定する作業をすることになった。そのとき、情報としてつかわれたのは物質だけではなく、身体自身も含まれていた。尾形家の現当

主の奥さんが2度にわたってワラ打ち石の場所を特定するときに用いたのは、こうした現場に立ち物質のもつ情報をアフォードした結果であるといえることができる。

同様のことはゴシルイの男性がワラ打ち石の発見をきっかけに展開した語りにもみられる。これらの語りはすでにその場所にあたり、物質に情報として備わっていたりしたわけではない。奥さんにしろ、ゴシルイの男性にしろ、すでに忘れていた事柄を物質と場所に移動することによって思い出し、語ったのである。つまり物質や場所を介して語られる語り、記憶は、状況依存的、かつ一時的なものであって、確固たる存在ではないのである。

以上のように人びとの記憶を追い、社会関係や生活の記憶を再構成していこうと試みる時、我々は具体的な物質や場所において生起する記憶にすぎない。すると被災地において生活用具・民具・文書・建材などを拾いだし保全することは、人びとの具体的な記憶や生活世界を再現するツールとしての役割を担うことにつながる。ゆえに、被災地において博物館や資料館などの公的な施設における文化財レスキューとともに個人住宅を対象として、個人の位相で記憶を掘り起こす活動が欠かせないのである。

田口洋美は民具研究について、目にみえる物質そのものに注目する以上に、目に見えていない、物質がもつ背景や意味を引き出すことが重要であると述べている [田口1998]。物質の背景にある人びとの生活の有り様にアプローチすることは、田口が述べる目に見えていない物質の意味を引き出すことにつながる。そしてそれは地域社会で営まれた生活の有り様と人びとの生き方を個人の経験の起点として、個人の具体的な行動と活動の記憶を通して地域社会全体を見渡す可能性をもっているのである。

## ⑥……………おわりに

本稿では被災地において個人住宅における文化財レスキュー活動を事例として、生活用具・民具・文書・建材などを救う活動をするなかで、それが復旧や復興という被災地における地域開発に対して、どのように意味付けられるのか、そしてどのように活用しようのかを検討してきた。

本稿では救ったものの活用の可能性として、生活用具・民具・文書・建材などの背景にある生活文化や人びとの具体的な記憶の復元を論じてきた。こうした活動は、地域の復旧や復興にとってすぐに役立つものではない。

文化財レスキュー活動は、決して珍しいものを救うことを目的としているわけではない。人びとが当たり前で生活してきた、当たり前の事柄の痕跡や記録を残そうとする活動である。そしてその背景にあり、本稿で論じ、救う必要を強調してきた物質文化の背景にある生活の有り様、人びとの生き方もまた、問われるまでもない人びとが当たり前のようにしてきた営みである。したがって、観光が経済的な効果を目的として活用しようとする地域文化、文化遺産とは異なった性格をもっている。

被災した物質文化を救い、保管できる形にする作業は多くの時間を必要とする。これらを活用して物質文化の背景にある生活や文化を読み解く作業が始まるのは、保管に目処がついたあとである。したがって保管に目処がついた時点で、すでに地域のインフラストラクチャーの整備や町の復興計

画の策定は終わっているかもしれない。

しかしハードとしてのインフラストラクチャーや住宅、工場などを運用していく作業は長い時間のなかで再編しながら続けられる人びとの営みそのものである。すると被災後に再建された町をどう運用するのかは、人びとの営み、生き方の問題に関わる。その運用を考えようとするときにこそ、人びとが災害の前にどのような関係性を築いていたのか、それをどのように活用して地域を再興してきたのかという人びとの生き方と、その具体的な形である自然一人、人一人の関係性の有り様とその変容は改めて問われることになる。それは言わば、個人や個人を取り巻く地域社会の自己像を再発見・再構築するプロセスにはかならない。

この自然一人、人一人の関係性の有り様とその変容をあきらかにしようとするとき、本稿でみてきたように、具体的な物質や場所は具体的で鮮明な記憶にアクセスするきっかけをつくることになる。その意味で、一見すれば無関係によようにもみえる文化財レスキュー活動は地域開発という課題と密接に関わるのである。

この試みは決して研究者が地域の人びとに教えるという性格のものではない。文化財レスキュー活動においては、専門的な知識を要する場面も多い。しかし救ったものを活用して地域にアプローチする活動は、インタラクティブなものであってよい。いかにしてインタラクティブな関わりをつくり出して行くかは今後の課題となる。研究者は、功罪は問われるべきであるが、地域開発という文脈のなかで結局のところプレーヤーなのである。

ところで本稿で扱った文化財レスキュー活動は、民俗学を含む文化学にとって非日常的な活動であり、同時に研究者や学問分野の自己像を問うものでもあった。災害という緊急時に文化学は何ができるのかを問われ、その答えのひとつとして文化財レスキュー活動があった。活動は緊急時を対象としたものであったが、緊急時と日常の研究活動は切り離されるものではない。緊急時に各学問領域ができる活動は、日常の研究活動を越えるものではないのである。以下では、緊急時の活動を通してみえる民俗学の可能性について述べておきたい。

東北地方太平洋沖地震の災害を経験して、現在、博物館や大学を中心に災害時の対応マニュアルの策定が急がれている。災害時対応マニュアルは、将来に起こる可能性のある災害のなかで、ある程度の効果をもたらすだろう。

一方で文化財レスキュー活動は、決して被災時に特有のことを被災時に特有の知識をもって遂行する活動ではない。もちろん災害時のために覚えておくべきことはあるが、現場でどのように活動を進めるのかは日常における研究活動の成果に依存するほかない。そして日常の研究で獲得した知識は、災害という緊急時であるからこそ、改めてその意味を問い直し、明確化していく必要のあるものとして立ち表われてきた。

研究者が被災地域に入っておこなう活動では、被災地の人びとやマスメディアからその活動の意味をたびたび問われる。その問いによって、研究者は個人の活動の動機と自分が専門とする学問分野の自己像を見直し、他者に表明することを求められるのである。

意味を問い直す活動は民俗学の初発の問いを探り直すことにつながる。そして現場に立つことによって、フィールドワークという民俗学にとって必須とされる活動の意味を問い直すことになる。以上に述べてきたように、文化財レスキューは被災時の緊急対応ではあるが、この活動自体が研究

者の依って立つ学問分野にフィードバックするものであり、日常の研究活動の意味と方向性を深めていくことになるのである。

本稿を通してみてきた物質を通して人びとの生活をみようとする試みは、始まったばかりであり、まだ有機的に連関する地域社会の関係性を描くところまで至っていない。したがって、本稿では物質文化の救出を通してみえる地域の生活の有り様を断片的に紹介したに過ぎない。

しかし、ともすれば地域コミュニティの結束の強さと復旧・復興の速度が関係づけて語られる被災地の現状に対して、人びとがどのように生きたのか、またこれからどのように生きようとするのかを考える資料としての物質文化の可能性を追求していくことは、直接的にはないにしても、文化財レスキューという活動が地域社会に還元できる可能性を広げていくことだろう。

## 註

(1)——2011年7月22日から9月23日の期日で開催した遠野市立博物館の展示「文化財を救え！～東日本大震災と文化財レスキュー～」や震災復興祈念巡回パネル展示「救え！故郷の証 つながれMIYAGI」など、地域の歴史や文化を救う活動を紹介する取り組みには「救え」というよびかけの姿勢が強く打ち出されていた。

(2)——美術系博物館が集まってつくった全国美術館会議や自然系博物館、動物園などのように日頃から学芸員同士が活発に情報を伝えていた分野にくらべ、歴史系・民俗系博物館では施設同士のつながりが弱かったことに対する反省から、歴博がよびかけて全国歴史民俗系博物館協議会を立ち上げた。また、博物館同士が被災時の協力協定を結ぶ試みや歴史資料ネットワーク(史料ネット)が各地で立ち上がるなど、将来の災害に向けた取り組みが活発化している。

(3)——加藤幸治ら東北学院大学のチームは、宮城県牡鹿半島にある鮎川収蔵庫における文化財レスキュー活動の成果から、被災地の公民館などをつかって移動博物館を実施し、収蔵庫から救った資料を陳列し、地域の人びとの生活の記憶を聞き取る活動をしている〔加藤2012〕。資料を前に人びとの語りを記録することを通じて、博物館資料のバックデータを集める活動であるとともに、文化財レスキュー活動の成果を公開する活動としても意義深い。また、保存科学の専門的な視点から、条件の悪い場所で保全されている被災資料・文化財をより効率的に管理する手法の開発が進められている〔日高・岡田2012〕。

(4)——文化財レスキュー活動は、被災地で人手に渡ったり破棄されたりして文化財が散逸してしまうことを防ぎ、保全したのちに確実に所有者に返還することを目的として組織されてきた。制度上、救われたものは条件が

整い次第、所有者に返却することが方針となっている。

(5)——文化財レスキューの制度上のテクニカルな問題として、文化財レスキューの活動範囲を安定的に保管できるところまでとすることはあり得る選択である。一方でそうした活動に関わる側のモチベーションの問題として、それらをどのように位置づけていくかは法的な問題とは別に学術的にも道義的にも課題となる。

(6)——公的なセクタにおいて文化財を救うときにも、関係者との間でラポールを構築していく必要があることは言うまでもない。しかし学術的な価値や地域のなかでのモノの位置づけについての暗黙の合意がある公的なセクタに対して、個人の住宅や土地では生活が学術的に位置づけられているわけではなく、現場で相互交渉が可能な関係性をつくることが求められる。

(7)——橋本裕之は被災地においてコミュニティの復活を謳いながらおこなわれる民俗芸能の多くが、民俗芸能を培ってきた関係性や場の問題を無視していることを岩手県の事例から指摘している〔橋本2012〕。橋本は民俗芸能が支えられてきた現場とそこにできた関係性をいかに回復していくのかが、無形文化財としての民俗芸能を未来に伝えて行くこと以上に重要であるとする。

(8)——気仙沼市の北の岩手県陸前高田市に月山神社があり、直接的にはこの神社との関わりも考えられる。同様に尾形家に保存されていた御札には巖嶋神社や金華山神社、西宮神社などの名前がみえるものの、地域に多くの神社があり、どこの神官が書いたものかが特定できないものが多い。また寺院の名称は書かれていない場合が多く、場所の特定は難しい。

(9)——尾形家ではゴシんルイ(シんルイ:親類)とシンセキ(親戚)という言葉を明確につかい分けている。ゴシんルイとは、本家である尾形家から分家した家で、

かつ小々汐の集落内に住みつづけている家を指すのに対してシンセキは姻戚関係にある人びとを指すのが一般的な定義である。したがって、ゴシルイであっても集落から居を移し、よそに転出してしまおうとその家はゴシルイとはよばなくなる。本来、ゴシルイは尾形家から直接分家した6軒の家を指す言葉であった。しかしその後、6軒の家に新たにできた分家4軒を加えて、小々汐・尾形家のゴシルイは10軒になった。その10軒は特別なゴシルイであるが、さらにその後が増えた分家もゴシルイに加えていった。すると集落のほとんどの家がゴシルイとよばれるようになった。ところがほかの地域の人と結婚して家からは出たものの、仕事場が気仙沼にあることから小々汐に住み続けるようになったり、一度ほかの地域の人と結婚したもののやがて小々汐に戻ってきたりというように、ゴシルイの定義に合致しない人びとが現れた。そうした数少ない人びとを集落の行事

などによぶときに不都合が生じたことから、結果的に小々汐に住む人びとをすべてゴシルイに加えることになった。ただし本稿のノウハダデヤススハキで登場するゴシルイは本来の特別な10軒のゴシルイである。

(10)——六部は本来、六十六部とよばれていた宗教者であり、「六六巻の法華経を用意し、全国六六カ国を旅歩いて、一国の著名な社寺毎に一部ずつの法華経を奉納する旅の宗教者」[気仙沼市史編さん委員会1994年]を指す。実際には修行をする宗教者からものもらいを目的とした人びとまでその性格は多岐にわたったという。

(11)——尾形家でノウハダデ(農ハダデ)とよぶ行事は人によってはノウハダチとよぶこともある。年明けには初めて農作業をする日である。『気仙沼市史 VII 民俗・宗教編』[気仙沼市史編さん委員会1994]には馬屋にある肥を水田に出したり、縄をなったり、草履、馬の腹帯、馬靴などをつくると記されている。

#### 引用・参考文献

- 相澤亮太郎 2005「阪神淡路大震災被災地における地藏祭祀一場所の構築と記憶—」『人文地理』第56巻第4号, pp.62-75。
- 石井正己編 2012『震災と語り』三弥井書店。
- Winter, J., 2006 Remembering War: The Great War between Memory and History in the 20th Century, Yale University Press.
- 小国喜弘 1995「昭和初期郷土教育における民俗伝統への接近——宮本常一の教育実践を中心にして——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』35, 東京大学, pp.265-274。
- 奥村 弘 2012『大震災と歴史資料保存 阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』吉川弘文館。
- 加藤幸治 2012「東北学院大学における被災文化財への支援活動」日高真吾編『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』財団法人千里文化財団, pp.68-86。
- 川島秀一 2012『津波のまちに生きて』富山房インターナショナル。
- 気仙沼市史編さん委員会編 1990『気仙沼市史 III 近世編』宮城県気仙沼市長 小野寺信雄。
- 気仙沼市史編さん委員会編 1994『気仙沼市史 VII 民俗・信仰編』宮城県気仙沼市長 小野寺信雄。
- 気仙沼市史編さん委員会編 1997『気仙沼市史 V 産業編(下)』宮城県気仙沼市長 小野寺信雄。
- 小池淳一 2012「文化財未満!?—民家からのレスキューをめぐって」大学共同利用機関法人人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会編『人間文化研究情報資源共有化研究会報告書3』人間文化研究機構, pp.5-9。
- 国立歴史民俗博物館+青木隆浩編 2013『【歴博フォーラム 民俗展示の新構築】地域開発と文化資源』岩田書院。
- 佐々木正人 1994『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店。
- ジェームス・J・ギブソン, 吉田敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻共訳 1985『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社。
- 蘇理剛志 2003「阪神・淡路大震災と慰霊」岩本通弥編『現代民俗誌の地平3 記憶』朝倉書店, pp.14-40。
- 田口洋美 1998「見えるものから見えない諸関係へのアプローチ」『日本民俗学』213号, pp.25-34。
- 日本民話の会編 2013『聴く 語る 創る 第二十一号 特集東日本大震災を語り継ぐ』日本民話の会。
- 橋本裕之 2012「岩手県沿岸部における無形民俗文化財への支援と今後の課題」日高真吾編『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』財団法人千里文化財団, pp.122-133。
- 葉山 茂 2013a『現代日本漁業誌—海と共に生きる人々の七十年』昭和堂。
- 葉山 茂 2013b「モノの救出から物語の救出への展開—気仙沼市小々汐・尾形家住宅における活動を事例に」国立歴史民俗博物館編『東日本大震災と気仙沼の生活文化(図録と報告)』国立歴史民俗博物館, pp.64-71。

- 
- ピエール・ノラ 2000「記憶と歴史のはざまに—記憶の場の研究に向けて」『思想』911, pp13-37。
- 日高真吾・岡田健 2012「被災した文化遺産のレスキュー活動—東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」日高真吾編『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』財団法人千里文化財団, pp.56-67。
- 松田素二 1991「方法としてのフィールドワーク」米山俊直編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.32-64。
- 森田真也 2003「フォークロリズムとツーリズム—民俗学における観光研究—」『日本民俗学』236号, pp.92-102。
- 宮本常一 1967『宮本常一著作集』第6巻, 未来社。
- 宮本常一 1975『宮本常一著作集』第18巻, 未来社。
- モーリス・アルヴァックス, 小関藤一郎訳 1989『集会的記憶』行路社。
- ロバート・D・パットナム 2001『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版。
- 安川晴基 2008「『記憶』と『歴史』—集会的記憶論における一つのトポス—」『藝文研究』94, 慶應義塾大学藝文学会, pp.282-299。
- 柳田國男 1990「郷土生活の研究法」『柳田國男全集』28巻, 筑摩書房, pp.7-244。
- 山口弥一郎(石井正己・川島秀一編) 2011『津浪と村』三弥井書店。
- 山田恵吾 2000「宮本常一における『民俗学的郷土教育』論の形成—1930年代小学校教員時代の分析を通じて—」『筑波大学教育学系論集』25(1), 筑波大学, pp.1-18。
- 吉田正広 2011「『記憶の場』の歴史学を目指して」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』30, 愛媛大学法文学部, pp.51-66。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014年1月21日受付, 2014年5月26日審査終了)

---

## **Significance and Future Prospects of Activities to Preserve Lifestyle and Culture in Disaster-hit Areas : A Case Study of the Ogata Residence in Kesenuma City, Miyagi Prefecture**

HAYAMA Shigeru

This article examines project for the rescue of cultural properties in disaster-hit areas from the viewpoint of community development and discusses their problems. To this end, the activity of the National Museum of Japanese History to recover the daily utensils, folk tools, old documents, fixtures of the Ogata residence, a private house in Kogoshio, Kesenuma City, Miyagi Prefecture, is used as a case study.

A viewpoint of community development is considered essential for examining problems now that the traces of buildings and life have been lost in the area affected by the Great East Japan Earthquake . I sort out the problems of community development in folklore, point out the recent emphasis on tourism in discussions of community development, and attribute the viewpoint of community development in folklore to the “community education” of Tsuneichi Miyamoto. He discussed the community education based on residents’ logic. Similarly, it is necessary to make a good use of the results of the project for the rescue of cultural properties to clarify how people have lived and how their current problems can be solved in the context of community development in the disaster-hit area.

On the basis of the above discussions, this article emphasizes the necessity to pay attention to the relationships people have established with the nature and other people and to study the specific details of the relationships when examining the lifestyle of local people. In addition, this paper outlines the history of the Ogata family and uses instances such as tablets, Oshirasama (folk religion), and a medicine chest to discuss the social relationships represented in the cultural assets recovered from their residence.

Moreover, the process of reminding people of their memory hidden behind material goods is explained by using the process of searching the straw anvil of the Ogata family as an example. Referring to the theory of affordances by Gibson, this study indicates that the story narrated over material goods is not isolated as an internal memory of the speaker but closely connected to certain material goods or places and recalled only when the conditions are right.

In other words, such memory is awakened depending on the situation, which might be brought about with the help of goods recovered through cultural asset rescue activities. Moreover, there is a possibility that the attempt to “rescue” the lifestyle and culture behind material goods may be useful in solving problems of community development such as an effective use of them after infrastructure is established.

**Key words:** Project for the rescue of cultural properties, community development, material culture, experience, memory

---